

URL <http://www.okayama.med.or.jp/activity/bukai.html>

## 目次

ピンクリボン岡山の活動報告	1
第6回岡山MUSCATフォーラム「しなやかにメインストリームへ」	3
「おかやまマラソン」救護ボランティアに参加して	4
山陽女子ロードレースでの活動	5
シリーズ女性医師支援 金光病院での女性医師支援	6

## 岡山県医師会

〒703-8522  
岡山市中区古京町 1-1-10  
TEL 086-272-3225  
FAX 086-271-1572  
E-mail:  
oma@po.okayama.med.or.jp  
URL:  
okayama.med.or.jp/activity/  
bukai.html

## ピンクリボン岡山の活動報告

岡山県女医部会 副部会長 渡辺 恭子  
岡山済生会総合病院

ピンクリボン活動は8人に1人が乳癌にかかるというアメリカで1980年代、乳癌で亡くなった家族がリボンを結んで乳癌の啓発活動をしようとしたのが始まりで、各自治体や団体でさまざまな活動がなされています。

ピンクリボン岡山は、NPO法人瀬戸内乳腺事業包括的支援機構の岡山大学土井原教授を中心に、岡山県、岡山市、岡山県医師会、国保連合会、看護協会、診療放射線技師会、健康づくり財団、患者会の共催で昨年2月から5回の準備会を経て、10月、岡山城ライトアップ、ターミナルスクエアビルのイルミネーション、懸垂幕、マンモグラフィー検診車での無料検診、イオンモール岡山の未来ホールでの無料映画と県民公開講座を開催しました。

準備会では、行政やいろいろな職種や患者会の方々と意見を出し合いオリジナルのピンクリボンバッジの作成等もできました。岡山市・県の懸垂幕や病院玄関のポスター、TV/新聞の告知、駅でのパンフレット・ティッシュ配布等の効果(?)もあって、イオンモール岡山の未来ホールでの公開講座は40歳~70歳の多くの女性が参加され、アンケートでも来年の参加希望が90%を超えていました。

ピンクリボン活動団体は全国で356団体あり、自治体参加でも首都圏・京都・福井・福岡・鹿児島等講演会やウォークラリー等様々な活動がされてい

ます。京都は2005年の発足以来全国43位であった受診率が、2011年には22位まで改善したと報告しています。

当院でもH26年度乳がん検診9,837人中MMG併用検診は74.7%でしたが、10・11・12月の3か月でH27年には1.7~7%MMG併用検診の割合が増えました。

女医部会での報告の際も、県北の先生から次回ポスター等の協力の申し出もありました。

年々活動を広げるためにはピンクリボン広告仕様の自動販売機（現在3台設置予定）等も含め、活動を支える体制づくりや広くご協力を仰ぎたいと思っています。

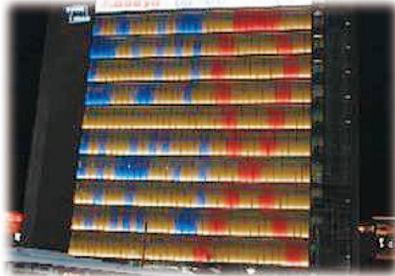
今回の活動を通じて、寄付およびご協力いただいた方々に深く感謝申し上げます。

(尚NPO法人瀬戸内乳腺事業包括的支援機構のHPにて掲示と謝意を表示させていただいています)





岡山城ライトアップ



駅前 ターミナルスクエア



ピンクリボンバッジ



病院正面玄関のポスター



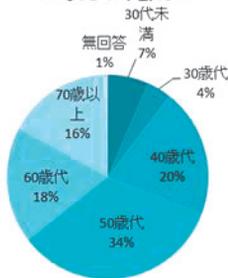
ピンクリボン仕様  
自動販売機

## ピンクリボン岡山 第1回県民公開講座アンケート

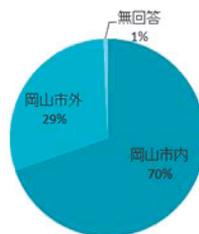
パンフレット配布人数約 265 人

入場者：230 人 アンケート回収 138 人回収率 60%

あなたの年齢は？



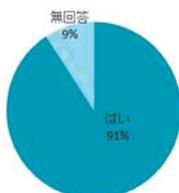
どちらからお越しになりましたか？



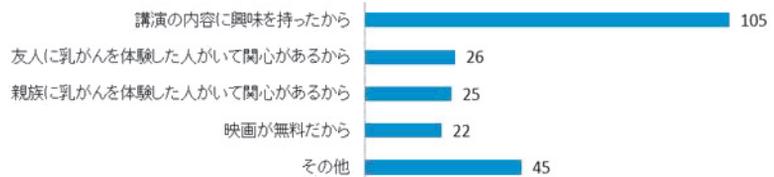
あなたは今までにマンモグラフィー  
検診を受けたことがありますか？



来年、ピンクリボン岡山 県民公開講座  
があれば、参加したいとおもいますか？



参加の動機は？(複数回答可)



## 第6回岡山MUSCATフォーラム 「しなやかにメインストリームへ」

岡山赤十字病院皮膚科 山口 麻里 先生

日 時：平成27年10月10日（土）13：30～16：30

場 所：地域医療人育成センターおかやま（MUSCAT CUBE）3階 MUSCAT Hall

「将来お母さんみたいな母親になりたい。」幼少期から私はそのような思いを抱きながら育った。仕事で忙しい父を支えながら、多くの時間を自分と共に家で過ごしてくれる家庭的な女性。そんな母に憧憬を抱いていた。大学生になり医学部に入った私はそこで恩師と出会い、女性医師のキャリアに関しての様々な講演を聞く機会を得た。多くの先生・諸先輩方のお話を聞くことで、自己を客観的に見つめ、また自身を取り巻く周囲の環境や今後自分に訪れるであろう問題を知るきっかけが与えられ、それらは自分の糧となった。そしてまた、女性でも母でもずっと働き続ける医師像に魅力を感じ、それに向けて自分の意識が変革していった。

そんな中、今回第6回岡山MUSCATフォーラムにて津田喬子先生の講演を拝聴した。お話の中では、女性医師キャリア問題のこれまでの歴史や推移、現状や問題点・それに対する解決策/必要要件がとても分かり易く示され、おかげでこれまで私が過去に学び聞いてきた細切れの事柄が滑らかに繋がり頭の中で整理され、かつ新しい知見・知識を得ることができた。講演を聞き終わる頃にはなんだか心がホクホクとし、質疑応答の際に「思わず涙してしまいました」と仰った先生がいらっしまったのも本当に頷

けた。それだけ、先生のお話には胸を打つものがあった。また、キラキラと輝いて見える津田先生の姿は、女性医師達のまさにロールモデルなのだ実感した。

その後のチームディスカッションはまたとても楽しい時間であった。初めてお会いする先生・先輩方と共に、軽食を頂きながら話し合う。ちょっとした女子会のような雰囲気でありながら、次々と参考になる意見やお話が飛び交い、そこにいるだけでいろんな考えが体に飛び込んでくる。グループによっては医学生や他県のキャリア支援室の方、他職種の方もおられ、発表を聞くと自分の想像の枠を超えた新しい発想が沢山あった。

今回フォーラムに参加したことで、また一層世界は広がった。

「将来お母さんみたいな母親になりたい。」優しく温かい母を尊敬する気持ちは変わらない。ただし、私の夢には続きがある。「そしていつまでも医師として女性として、胸を張っていられる自分でありたい。」

第6回岡山MUSCATフォーラム、参加して良かったです。貴重な経験を与えて下さいました諸先生方・御関係者様方に心より感謝申し上げます。



# 「おかやまマラソン」救護ボランティアに参加して

岡山県医師会女医部会 部会長／深田内科 深田 好美

同上 副部会長／岡山市立市民病院 坂口 紀子

マラソンブームにのって、あちこちでマラソン大会が開催されています。岡山でも、「第1回おかやまマラソン」が11月8日に開催されることになり、女性医師も参加を依頼され、女医部会から我々二人と松香陽子先生、県医師会の神崎寛子理事の4名がボランティアで参加しました。この4年程、山陽女子ロードレースで救護ボランティアをしてきましたが、参加者も少なく、怪我もほとんどない大会でした。今回は一般参加の人ばかりで、人数も1万人以上という大きな大会なので、色々大変だろうと思いました。

まずは、10月18日（日）に事前説明会が、岡山市立市民病院1階のホールで行われました。分厚いマニュアルと当日のウェア（職種別のカラーで医療者は赤白）とキャップが配布され、担当者から約1時間の説明がありました。

私たちの担当は、ジップアリーナの女性救護室です。集合時間の6時10分が気になって、熟睡できない夜でしたが、まだ暗い中運動公園に向かいました。ジップアリーナは、手荷物預かりや更衣室で、スタート地点の近くなので、7時頃からランナーや家族が続々と集まってきました。ファンラン（市役所まで）の参加と思われる奇抜なコスチュームの人達も目を楽しませてくれました。スタート前には、知事、市長、有森裕子さんなどが挨拶され、うらじゃチームの踊りが、場を盛り上げていました。有森裕子さんもマラソンに参加されましたが、2007年の引退レース以来、8年ぶりのフルマラソンだったそうです。朝から降っていた小雨ですが、さすが「晴れの国岡山」、スタート時にはほとんどやんでおり、転倒もなく無事に皆さん出発されました。1万5千人近くのランナーが、10分以上もかかってスタートしてゆくのは、本当に壮観でした。皆元気に帰ってきて、と願わずにはおられませんでした。

スタート前は、会場に来る途中で転んだ人が救護所に来られたくらいで、その

後は何もすることがなくなりました。担当エリアが決められた13の救護所に医師とスタッフが配置され、ドクターランナーも何人も走っておられ、それぞれ救護にあたられました。ジップアリーナの救護所は、ランナーがゴールし始めてからが、本格稼働となりました。

トップのランナーは、余裕の走りでしたが、しばらくすると、「足がつって歩けない」「気分が悪い」「むかむかする」等、次々と調子の悪い人達が訪れ、一時はベッドが満員になるほどでした。中には、この2か月でマラソン3回目という強者もおられました。結局、ジップアリーナでは、救護所来所者は67名、救急搬送は2名でした。足の痙攣が最も多く、走ったあと、最後にジップアリーナの2階への階段の上り下りが、きつかった様に思います。来年は、何とかならないでしょうか？

全救護所の利用件数は588件、救護所以外が137件で合計725件の救護が行われたそうです。多くは軽傷者でしたが、19件の救急搬送があり、AEDも1回使用されました。幸いスタッフやドクターランナーが駆けつけ、救命できました。

マラソン 13,952名、ファンラン 495名が走り、完走率 89%だったとの事です。完走者がもらったメダルは、備前焼で、岡山らしくて好評だったようです。ボランティアの数は、4,273名と発表されていました。本当に多くの方が協力して、大きな事故もなく、無事に終了した「おかやまマラソン」でした。走ったわけではない私たちも、大会の雰囲気を楽しむことができました。今年は、11月13日（日）に開催予定です。皆さん、ボランティアしてみませんか？



## 山陽女子ロードレースでの活動

岡山県医師会女医部会 副部会長 清水 順子

12月23日の祝日に行われた山陽女子ロードレースに女医部会から、救護と乳癌・子宮癌検診の宣伝と入賞者への副賞の贈呈に行ってきました。

女医部会が参加するのも3回目で、大分要領もわかり、テントの下に女医部会のブースを作るのも手馴れて、女医部会のピンクの横断幕、幟旗もすばやく設置。岡山県医師会の名前の入った黄緑色のおそろいのジャンパーに着替えて乳癌・子宮癌検診のパフレット（ポケットティッシュもセットされている）を検診の声掛けをしながら配りました。レースの様子を映し出す大型スクリーンをスタンドで見ている人たち、応援に来ていた人たち、走り終わった選手やチームメイトなどにも渡しました。いつもはトラックで小中学生の部の競技があり、付添いのお母さんたちがたくさんスタンドに座っているのですが、今回はシティライトスタジアムが改装中のため小中学生の部がなく、検診年齢にぴったりのお母さんたちに渡せなかったのが残念でした。

競技は、ハーフマラソンと10kmロードの2競技、女子ロードレースらしく、先導の白バイを運転するのも女性警察官です。スタートすると、選手は一瞬で目の前を通りすぎて行き、テレビで見ているのとは全く違う迫力に驚きです。

スタート地点には大会役員や来賓の方々が大勢おられました。女性役員は少数、ほとんどはガタイの良い元アスリートとおぼしき少し年配の男性で、私が小柄なためか不思議な感覚がしました。スタートから30分過ぎると10kmロードの選手、1時間過ぎるとハーフの選手が次々とゴールしてきます。あのスピードで走り通しても平然とゴールしてきます。思うように記録が出なかったのか泣きながらチームメイトになぐさめられている人、時間内に完走できて喜び合う人、様々です。

表彰式では、10kmロードの部の1位から6位入賞の選手に女医部会からの副賞を渡しました。天満屋の包みの中の今年の副賞はナイキのネックウォーマーとタオル、お花の石鹸の組み合わせとのことでした。

救護は、先日の岡山マラソンを真似て山陽女子ロードレース用の診察記録まで用意して万全の態勢で構えていたのですが、市民マラソンと違い一定の選考基準を満たした選手だけに、救護室の利用者は一人もありませんでした。

有森さんのサインも貰って私も久々に運動するぞと密かに決心した一日でした。



## 「金光病院での女性医師支援」



特定医療法人社団同仁会 金光病院  
理事長・院長 難波 義夫 先生

金光病院の前身は、岡山大学附属病院の分院で昭和24年5月から昭和32年3月まで金光分院として活動しておりました。岡山の鹿田町の本院が戦後の混乱から整備され金光分院が閉院されることになって、せっかく、病院の施設があるので地域で継続しようと地元の有志の方々が、お金を出し合って医療法人を設立、昭和32年4月より医療法人同仁会金光病院として開院しました。そして、持ち分なしの特定医療法人として経営しています。歴史を辿っても、経営形態からも救急を含む急性期、回復期、慢性期の医療を担う、公的要素の高い地域の中核病院として活動しております。

当院の常勤女性医師の参加は、昭和50年台後半からで、当時は若く独身で赴任され、男性医師と遜色なしに働かれておりました。その後も、数人の先生が1～2年周期で赴任され、検査、当直、救急対応等問題なく勤務されておりました。ただ一度、大学へ帰られるタイミングで出産をされる予定で妊娠された先生が、切迫流産で勤務が不規則になった時があり、大学の医局にこういうケースもありますよと報告しましたが、当時はまだ、医局長をはじめそのような女性医師の問題は認識が薄かったように思われます。

現在、当院は、急性期病床50床、地域包括ケア病床50床、医療型療養病床47床、計147床で、常勤医師は、内科4名、外科3名、泌尿器科1名、皮膚科1名合計9名でうち内科医師2名が女性医師です。そのうち、1名は子供さんが小学校低学年で、週3日は時短で、午後3時には上がるようにしております。ただし、その先生は当直、休日日直は都合を付けて、他の常勤医師と同じように入っており、助かっています。非常勤の先生も子育てがあり、週3日の勤務で、学校行事等にはフレキシブルに対応しております。その他、眼科、小児科、耳鼻科等も女性医師の方に非常勤で勤務していただいております。

院内保育所も開設していますが、残念ながら、医師の利用は今のところありません。女性医師が赴任されるときは、個々の事情を十分に配慮し、相談して、フレキシブルに対応してきましたが、人数が少なく、他の医師に負担が多くかかっていることは間違いありません。

われわれのような、ある程度の救急も対応している中小病院では、医師数の絶対数が不足しており、病院内で中心になって働いている医師が不規則勤務にならざるを得ない状況はかなり病院運営に支障をきたすことは事実です。産前産後の休暇、育児休暇をとれるような状況にするには、大学等の支援が必要です。

これからも女性医師の割合は増えるでしょうし、どんどん活躍していただかなければなりません。そこで、女性医師もしっかりキャリアを積めるように、システムを構築していかなければなりません。最先端の高度医療で活動の場を希望する女性医師から、在宅を中心に家庭医を目指す女性医師まで幅広い選択肢があると思います。しかし、出産（こればかりは男性が代わることはできません）という大事な人間としての仕事があり、それに伴う、結婚、育児（これは男性もしなくてははいけません）等があり、キャリアを積み過程で仕事を一時中断せざるを得ない状況を生みます。優秀なDNAを後世にぜひ残していただきたい思いは私の中に強くあります。

キャリアアップの工程は、一病院だけで考えるのではなく、これからの卒後研修、専門医制度の構築の中で、それぞれの女性医師の希望等をよく聞き、吟味してそれぞれのキャリアアップのカリキュラムを考えれば良いのでしょうか。しかし、「恋は人生を狂わす」ではないですが、いろいろな出会いが、その工程の変更を余儀なくされるケースも数々出てくるでしょう（それはそれでいいのでしょうか）。

大学病院とか常勤医の多い病院では、産前産後の休暇、育児休暇で長期休暇の場合、対応はどうか都合がつくのかもかもしれませんが、常勤医が少ない中小の病院でそのような場合は、どうしても大学あるいは基幹病院の応援が必要になってきます。そのあたりをきっちりとしていただきたいのが、中小病院の管理者としてお願いします。学校の場合の代行教員のような、産体育休中の応援として代行医のようなシステムが組めればいいのですが、それには全体の医師数の増加が必要でしょう。

最後に、当院が現時点で可能な女性医師での支援は

1. 院内保育所
2. それぞれの先生に応じた、勤務体系の設定  
(時短、当直免除等)

3. 週に何日でもいいから非常勤で来ていただける先生の確保  
(ブランク後の復帰支援にもつながり、将来、勤務日を増やし、常勤医への期待も望める)

#### 4. 女性医師専用の更衣所

これらは、医師だけでなく、女性が多い病院の他の職種にも言えることで、優しく働きやすい環境を整えることは、病院にとってとても重要なことと思います。

私が医師になって初めて赴任した病院の院長先生がおっしゃった言葉が、今も心に残っています。忘年会の日に「女性が多い病院では、今日は男性が女性にサービスする日なのだよ！」今では忘年会の日だけではないですよ。



